

9

熊本・鹿児島地区住民における動脈硬化性疾患に対する危険因子の長期追跡研究

研究代表者名： 小川久雄¹

共同研究者名： 河野宏明¹、三角憲二²、小山和作²、丸山征郎³、合志秀一⁴、入佐孝三⁵

施設名： 熊本大学医学部循環器内科¹、日本赤十字社熊本健康管理センター²、鹿児島大学医学部臨床検査³、総合健診センター「コスモ」⁴、菊池養生園診療所・菊池広域保健センター⁵

背景

生活習慣の欧米化と人口の高齢化に伴い、虚血性心疾患や脳血管障害を含む動脈硬化性疾患が増加し、大きな社会問題となっている。欧米における動脈硬化性疾患発症に対する危険因子の大規模研究の報告はあるが、わが国での同様の研究に対する報告はほとんど無い。我々が実施した日本人の急性心筋梗塞に対する危険因子の検討では、高血圧、喫煙、糖尿病が上位であり、欧米で上位を占めている高コレステロール血症は重要な危険因子ではなかった。欧米とわが国では危険因子が異なる可能性があり、わが国における危険因子を検討することは、日本人の動脈硬化性疾患予防の観点から重要であると考えられる。

わが国は南北に細長く地域によって生活習慣が異なること、気候に大きな差があることなどから動脈硬化性疾患の内容やその罹患率にも地域差が大きいものと考えられる。本研究は、わが国の南部に位置する、熊本・鹿児島地区を中心とした動脈硬化性疾患に対する動脈硬化危険因子について長期追跡を行い疾患との関係について調査するものである。本研究は平成13年度末に開始され、現在進行中である。本稿では、高血圧と年齢との関係、高血圧と耐糖能障害、高脂血症、肥満との関係について、開始直後のデータとして中間報告を行う。

対象と方法

人間ドックを受診した10627名、男性7242名(平均54歳)と女性3385名(平均56歳)を対象とした。高血圧に対する加療を受けている症例ならびに受診時血圧が収縮期140mmHg以上または拡張期血圧90mmHg以上を高血圧群とした。高血圧の年齢別頻度、高血圧群と非高血圧群で経口ブドウ糖負荷試験、総コレステロール、HDLコレステロール、中性脂肪、Body Mass Indexを比較検討した。

結果

男性では30歳代：94名/531名(17.7%)、40歳代：471名/2150名(21.9%)、50歳代：803名/2356名(34.1%)、60歳代：759名/1654名(45.9%)、70歳代：272名/467名(58.2%)であった。一方、女性では30歳代：4名/149名(2.7%)、40歳代：89名/834名(10.7%)、50歳代：255名/1080名(23.6%)、60歳代：406名/1015名(40.0%)、70歳代：142名/279名(50.9%)であった。

全ての年代にて高血圧群が非高血圧群より空腹時血糖値は高くなっており、ブドウ糖負荷試験でも1時間値ならびに2時間値の血糖も高血圧群の方が有意に高値であった。中性脂肪値、Body Mass Indexも全ての年代において、高血圧群が非高血圧群より高値であった。総コレステロールは高血圧群が非高

血圧群より高値である傾向を示した。一方 HDL は女性では高血圧群が非高血圧群より低値であったが、男性では差がなかった。

熊本県の南部に位置する球磨地方の脳梗塞患者の約 75%は収縮期血圧 140 mmHg 以上または拡張期血圧が 90 mmHg 以上である。脳出血患者は 85%が拡張期血圧 90 mmHg 以上である。このように、熊本県では脳血管障害と血圧の間に密接な関係がある。この地方は、焼酎の産地として知られており、飲酒と血圧との関係を調査したところ、連日一合以上の焼酎を飲む人の 25%は高血圧であり、飲酒をしない人の 13.8%より高率であった。

考察

高血圧は男女とも加齢とともに増加するが、男性は年代と共に徐々に増加するのに対して、女性では 60 歳代から増加しており、ここには閉経の影響があると考えられた。血圧と血糖値、中性脂肪、肥満は密接に関係していた。球磨地方では、飲酒と血圧が関係しており、このことが脳血管障害を引き起こしている可能性がある。

現在、我々は、球磨地方のみならず、熊本県東部、北部、西部地域の自治体ならびに健康診断を行っている民間施設と共同で住民調査を行い動脈硬化性疾患と動脈硬化危険因子との関係について長期追跡を行っている(対象人数 1 万人)。職域でも同様の検討を開始したところである(対象人数 1 万人)。また熊本県のみならず鹿児島地区でも同様の長期追跡研究を開始している。今後、熊本、鹿児島地区住民の生活習慣と動脈硬化危険因子ならびに動脈硬化性疾患との関係が明らかになると考えられる。本研究の結果は、地域住民の生活指導ならびに同地域の診療にも大きく役立つものと思われる。